

労働映画百選通信 No.05 2016.02

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

あなたのおすすめ「労働映画」は？

【労働映画についてのアンケート調査】実施しています！



労働映画 スペシャルサイト
<http://hatarakubunka.net/>

いま、働くことをめぐる困難がますます高まる中で、世界の多くの国々で労働を主題にした多くの映画作品が製作され、人々の共感をあつめています。そして、映画と労働の世界との関わりについての歴史的関心もまた高まっています。日本映画も同様に労働に向き合ってきた長い歴史を持ち、現在も多くの労働映画が産み出されています。

そこで、私たちは日本の映画作品が、仕事と暮らしの実態、働く人たちの悩みと希望、あるいは働くことの意義と喜びをどのように描いてきたかを考察し、現在と未来に向けての教訓をくみとることをめざし、日本映画百年の歴史が産んだ代表的労働映画百本を選ぶ作業を進めています。

その活動の一環として、映画と労働の世界にご関心を持つ多くの方々に、これまでに見た日本の労働映画の中で、もっとも印象に残る作品、多くの人に見てほしいと思う作品についてお教えいただき、日本の代表的労働映画百本を選ぶにあたっての参考にしたいと考え、アンケート調査を実施することとなりました。

調査は無記名であり、ご記入いただいた内容については統計的に処理しますので、個々の調査票を公表したり、調査の目的以外に使用することは一切ございません。

つきましては、調査の主旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

2015年7月1日

NPO法人 働く文化ネット 労働映画百選選考委員会

【上映情報】労働映画列島！ 2016年2月～3月 ※【労働映画列島】で検索！

◎新作ロードショー

バナナの逆襲 《2月27日(土)から 東京・渋谷ユーロスペースで公開、全国順次公開予定》

中米ニカラグアのパナナ農園で農薬被害に苦しむ労働者の裁判を追ったドキュメンタリー監督が、企業側から訴えられる……農園の労働実態を描いた映画と、その上映を巡る闘いを記録した2部構成。

(2009-11年 スウェーデン 監督/フレドリック・ゲルテン)

オートマタ 《3月5日(土)から 東京・新宿ピカデリーほかで公開》

アントニオ・バンデラス主演の近未来SFサスペンス。人間に代わる労働力となった人工知能搭載ロボットの異変を描く。

(2013年 ブルガリア=アメリカ=スペイン=カナダ 監督/ガベ・イバニェス)

これが私の人生設計 《3月5日(土)から 東京・新宿ピカデリーほかで公開》

世界で活躍後、故郷のローマに帰ってきた女性建築家が、保守的な男性社会の建築業界で奮闘する姿を描くコメディ。

(2014年 イタリア 監督/リッカルド・ミラーニ)

◎名画座・特集上映

【東京 ヴェーラ渋谷】2/13～3/4「フィクションとドキュメンタリーのボーダーを超えて」…裸の島／もの食う人びと／他

【東京 ラピュタ阿佐ヶ谷】～2/27「映画探偵の映画たち」…2/21～23『土(最長版)』(1939年/監督・内田吐夢)／他

【東京 池袋 新文芸坐】2/27～3/6「巨匠・内田吐夢のダイナミズム」…たそがれ酒場／飢餓海峡／限りなき前進／他

【東京 京橋 フィルムセンター】3/15～27「自選シリーズ 4 根岸吉太郎」…遠雷／キャバレー日記／雪に願うこと／他

【札幌 シネマフロンティア/ほか全国54館】「新・午前十時の映画祭」…2/20～3/18『東京物語』『秋刀魚の味』

【新潟 シネ・ウインド】2/21～3/4「想田和弘監督 観察映画大全」…選挙／精神／Peace／他

【大阪 梅田ブルク7/ほか】3/4～13「第11回 大阪アジア映画祭」…湾生回家(台湾)／あの店長(タイ)／他

【神戸映画資料館】3/5・6「神戸の映画・大探索」…大正10年 川崎・三菱大争議の記録／朝の波紋／他

【広島 八丁座】2/13～3/11「若尾文子映画祭 青春」…青空娘／東京おにぎり娘／閉店時間／他

【広島市映像文化ライブラリー】2/17～25「アキ・カウリスマキ特集」…愛しのタチアナ／ル・アールの靴みがき／他

【福岡 中洲大洋映画劇場】2/20～3/18「市川崑 光と影の仕草」…満員電車／黒い十人の女／炎上／他

【テーマ研究】#5 《鉄道》を描いた作品 資料作成:波多楽久

日本の労働映画の歴史を辿るとき、縦軸には「時代」があり、横軸には様々な職業や仕事の形態、労働の意義や現場の課題など、多岐にわたる「テーマ」が広がっている。この欄は、テーマごとに関連する作品を発掘していく試みである。

第5回は《鉄道》を描いた作品を集めてみた。1895年、フランスのリュミエール兄弟が撮影した『ラ・シオタ駅への列車の到着』をはじめ、アメリカの『大列車強盗』(1903)、フランス解放直後の『鉄路の闘い』(1945)、イタリアの『鉄道員』(1956)など、映画史の中での鉄道の存在は大きい。日本でも、近代化や復興のシンボルとして各時代の鉄道が描かれ、そこで働く人々にもスポットライトが当てられてきた。1963年の『ある機関助手』と2014年の『Brakeless』は、共に鉄道の安全性をテーマにした作品だが、2本続けて見ると、50年以上経っても現場の実態はほとんど変わっていないことがよくわかる。

ジャンル:【劇】劇映画 【記】記録映画 【短】短編映画 【TV】テレビ番組/ソフト:【DVD】【VIDEO】/【放】放送ライブラリー(横濱)で閲覧可能 【科学映像館】インターネットで無料配信中心

【劇】信号(1924) 日活 監督/村田実 出演/水島亮太郎
私鉄会社の線路番の責任感と友愛を描いた美談。

【劇】大都会 労働篇(1929) 松竹蒲田
監督/牛原虚彦 出演/鈴木傳明、田中絹代
鉄道の機関士と清掃夫の親子を巡るメロドラマ。
【記】全線(1932) プロキノ 監督/古川良範 【DVD】
東京市電・バス労働者にストを呼びかけるアジ・プロ映画。

【記】開拓突撃隊 鐵道自警村移民記録(1937)
満鉄映画製作所 編集/芥川光蔵 【DVD】
移民国策に呼応して満鉄が設置した鉄道自警村のルポ。
【記】機関車C57(1940) 芸術映画社 監督/今泉善珠
最新鋭の蒸気機関車C57をモチーフに、各部署の鉄道員たちの生活を浮き彫りにしてみせた秀作。【DVD】

【記】鉄輪(1940) 朝日映画社 監督/永富映次郎
検車・保線・出札・運転など、鉄道員の勤労状況を活写。
【劇】指導物語(1941)

東宝 監督/熊谷久虎 出演/丸山定夫、藤田進
定年間近の老機関士が、陸軍鉄道部隊の新兵を鍛える。
【記】慕進(1946) 日本映画社 監督/岩佐氏寿
従業員大量解雇に反対する国労の十月闘争の記録。
炎の男(1948) 東宝 脚本/楠田清、衣笠貞之助
国鉄再建を志す労働者の物語。東宝争議により未映画化。

【記】たちあがる輸送(1948) 日本映画社
荒廃した施設の復興、輸送力増強に取り組む国鉄の記録。
【記】号笛鳴りやまず(1949)

新世界映画社 監督/浅野辰雄 【NFC】
労働組合映画協議会委嘱作品。鉄道映画の隠れた傑作。
【劇】春雪(1950) 松竹大船
監督/吉村公三郎 出演/佐野周二、藤田泰子 【VIDEO】
東急渋谷駅員の女性が主人公。東急労組が撮影協力。

【短】白旗ぢいさん(1952)
内外映画社 監督/樋口源一郎 出演/左ト全
常磐線の踏切警手を務めるおじいさんと孫とのふれあい。
【記】つばめを動かす人たち(1954) 日映科学
監督/関川秀雄、苗田康夫 【DVD】【科学映像館】
全線電化前の東海道線。特急「つばめ」乗務員の仕事。

【劇】裸の太陽(1958) 東映東京
監督/家城巳代治 出演/江原真二郎、丘さとみ 【DVD】
田舎の機関区で働く若者たちの青春を、詩情豊かに描く。
【記】雪と闘う機関車(1958) 国鉄機関車労働組合
企画/旭川地本教宣部 監督/谷恭介 【DVD】
積雪とたたかひながら列車を運行する鉄道員たちの生活。

【劇】大いなる旅路(1960)
東映東京 監督/関川秀雄 出演/三國連太郎 【DVD】
岩手県を舞台にした、機関士一家の30年にわたる物語。
【劇】大いなる慕進(1960) 東映東京
監督/関川秀雄 出演/中村賀津雄、佐久間良子 【DVD】
東京発長崎行き夜行特急「さくら」車内の人間模様を描く。

【劇】トイレット部長(1961)
東宝 監督/笈正典 出演/池部良、淡路恵子
国鉄で駅内トイレ整備を進めた藤島茂の随筆を映画化。
【記】ある機関助手(1963) 岩波映画 監督/土本典昭
電化を目前に控えた常磐線・水戸〜上野間を運行する蒸気機関士と助手の労働をダイナミックに綴る。【DVD】
【記】駅(1964) 岩波映画 監督/藤久真彦 【DVD】
東海道線米原駅の助役・大橋さんの仕事と人生を紹介。
【TV】ある国鉄乗務員 スト中止前夜(1964)

日本テレビ 演出/大島渚ほか 【放L】
公労協統一半日ストの前夜。国鉄機関区の人々を追う。
【TV】連続テレビ小説 旅路(1967-68) NHK
脚本/平岩弓枝 出演/横内正、日色ともゑ
大正・昭和を生きた国鉄職員とその妻。1967年映画化。

【記】雪の行路(1971) 鉄道ジャーナル社 監督/竹島紀元
急行「ニセコ」を牽引する蒸機・C62重連を活写。【DVD】
【記】列車黄害(1976) 映画たむろ社 監督/小池征人
列車の糞尿たれ流しを告発する“黄害”裁判の記録。
【劇】遠い一本の道(1977) 左プロ-国鉄労働組合
監督・出演/左幸子 出演/井川比佐志 【VIDEO】
北海道で長年保線の仕事を務めてきた男と家族のドラマ。

【記】俺たちは鉄路に生きる! 第一報(1986)
国鉄千葉動力車労働組合 監督/宮嶋義勇
分割・民営化に反対する勤労千葉のストライキの記録。
【記】日本鉄道員物語1987(1986) 幻燈社 監督/小池征人
国鉄からJRへの変革を迫られた鉄道員たち。【VIDEO】
【記】背面監視(1998) ビデオプレス 監督/松原明
分割民営化以来、徹底した差別を受けてきた国労活動家への「背面監視」という異常な労務管理の実態。【VIDEO】

【劇】鉄道員(ぼっぼや)(1999) 東映ほか
監督/降旗康男 出演/高倉健、大竹しのぶ 【DVD】
北海道のローカル線で駅長を務める男が人生を振り返る。
【TV】さいはての大地で 国労闘争団の14年(2000)
毎日放送 演出/沢田隆三 【放L】
北海道で解雇撤回闘争を続ける国労組合員たち。職場復帰を求める14年の闘いを追う。

【記】人らしく生きよう 国労冬物語(2001)
ビデオプレス 監督/松原明、佐々木有美 【DVD】
現代のリストラの原点である、国鉄分割・民営化の実態。
【劇】RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語(2010)
ROBOTほか 監督/錦織良成 出演/中井貴一 【DVD】
一流企業を辞めた男が、故郷で電車の運転士を目指す。

【TV】復活 山田洋次・SLを撮る(2011) NHKほか 【DVD】
C61復活プロジェクトを、映画監督の山田洋次が記録。
【TV】Brakeless(ブレーキなき社会)(2014)
NHK=イギリス・BBC 演出/三宅響子
JR福知山線脱線事故の経緯を調査し、事故を誘発した効率優先の日本社会の現状に迫る。

*このリストを引用する時には【労働映画百選より】と付記いただきますよう、お願いします。

【作品ガイド】『サンドラの週末』 *deux jours, une nuit* 文:清水洋子

2014年/95分 ベルギー＝フランス＝イタリア 脚本・監督/ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌ
 出演/マリオン・コティヤール ファブリツィオ・ロンジョーネ
 《休職していたサンドラ。復職するつもりでいたら突然、上司から解雇を告げられる。解雇を免れる方法は、同僚16人のうち過半数が自らのボーナスを放棄することに賛同すること。翌週の月曜日の投票に向けて、サンドラは週末の二日間、同僚たちにボーナスを諦めてもらうよう、ひとりひとりに交渉しに向かう……》

1,000ユーロのボーナスと仕事仲間、どちらを選ぶ？ フランスの個人主義的ガチンコ交渉

おしゃれなフランス幻想など吹っ飛ば、労働者階級のリアルと「個人主義とは何か？」が迫ってくる映画だ。主演のマリオン・コティヤール演じるサンドラが所属するのは、太陽光パネルの製造工場。サンドラはメンタルを患い休職。復帰できるものと思っていたら、上司から解雇を告げられる。会社は世界のグローバル化の影響を受け、アジア勢の安価な製品にマーケットを食われている。その対策としてサンドラを解雇し、残った従業員に1,000ユーロ（日本円でおよそ13万円）をバラまき……というのだ。この決定をひっくり返すには、16人の同僚の過半数がボーナスを放棄すること。その交渉に使える時間は、たったの2日間！



[DVD]

ギャガ/KADOKAWA

サンドラはメンタルを患うくらいだから、メソメソ夫に泣きつく。しかし、ここが日本の夫婦と違うところ。＜夫は家族を養うもの＞などという思想は、ここにはない。「精一杯やってるけど、僕の給料じゃ家賃を払えない。協力するから、同僚に交渉しよう！」と妻を励ます。サンドラも夫を「この甲斐性なし！」などと罵らない。ふたり団結して、戸別訪問。夫は訪問先への車の運転はするけれど、交渉の場には、決して立ち会わない。交渉前、サンドラは精神安定剤をボリボリ。夫は「飲み過ぎだよ」とたしなめるものの、そうでもしないとサンドラは奮起できないのだ。

交渉の場面はとても簡潔だ。挨拶→本題→結論、以上！エチケットをわきまえ、精一杯の笑顔で交渉に臨むサンドラ。日本のような水面下の根まわしや、人を介しての誘導など一切ない。そしてボーナス13万円が欲しい人一人もいない。皆それぞれ、生活の苦しさを率直にサンドラに伝える。子供の学費、家族のリストラ、家賃……。サンドラの要望、先方の現状をストレートにやりとりする。13万円を棒に振ってもサンドラと働くことを選ぶ人、何が何でもお金が欲しい人。同僚それぞれの現実もサンドラはわかるから、感情的なしこりを残すことはない。それでも立ち向かわなければならぬプレッシャーに潰されそうになったサンドラ。今度は睡眠薬をがぶ飲みする。そこへ夫から朗報。病院で胃洗浄を受け、再び交渉の場へ駆けつけるのだから凄い。

サンドラには二人の幼な子もいるのだが、子ども達も「お母さんの窮状はお母さんの問題であって私達の問題じゃない」とばかりに、さっぱりしている。フランスの個人主義がどんなにシビアか、この映画は教えてくれる。同時に、仕事をする上での＜簡潔な交渉＞の有り様をまざまざと見せてくれる。サンドラは逃げなかった。（安定剤ボリボリ、睡眠薬ゴクゴクはどうかと思うけれど…）。一緒に仕事してきた仲間と真っ直ぐに対峙し、そこから導かれた結論に納得するサンドラ。ラストシーンのサンドラの笑顔は、ずっと遅く優しくなっていた。交渉が苦手な日本人は、サンドラの爪の垢を煎じて飲んだ方がいいかも。

清水洋子（しみずようこ）1967年生まれ。テレビディレクターとして26か国で労働。現在は主婦業とともに、福祉系のNPOで労働中。

【次回の労働映画鑑賞会】

2～3月の統一テーマ:都市開発の光と影

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に労働映画鑑賞会を開催しています。お気軽にご参加ください。

場所:連合会館 2階 201会議室（地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ）
 参加費:無料(事前申込不要、どなたでも参加できます)

第26回「巨大都市を掘る」

日時:2016年 3月10日(木)18:30～(18:00開場)

場所:連合会館 2階 201会議室

上映作品■

『銀座の地下を掘る 日比谷線建設記録』 1964年/36分

『地下を進む都市開発 シールド工法』 1967年/24分

内容■高度成長時代の都市インフラ建設を描く2作品をとりあげます。



【労働映画のスターたち】第5回「役所広司」 文：百永良武

神出鬼没、平成のマジメ人間

2016年1月1日。路線バスを運行する会社「長崎バス」のCM放送が、県内の民放局で始まった。運転手を募集するのが目的だが、CMの監督とバスの運転手役を兼ねたのが、地元・諫早市出身の役所広司氏であることが、インターネットなどを通じて全国的な注目を集めた。CMの内容は至ってシンプルで、まだ暗い早朝、車庫で車両の点検をする運転手（顔ははっきりとは見えない）の働く様子が淡々と描かれた後、長崎市内のくねくねと曲がった道を守るバスの姿に、「名もなき一日を走る、長崎バス」というナレーションが重なる。“名もなき一日を走る”というコピーが、平凡だが私たちの毎日の暮らしをしっかりと支えてくれている路線バスとその運転手の存在を際立たせ、観る者に温かい気持ちを抱かせる（CMは「長崎バス」ホームページでも見ることができる）。

そして、今や日本を代表する俳優として知られる役所広司氏もまた、こうした「名もなき一日」をマジメに生きる、平成時代の日本人を演じ続けてきたことを、このCMを通して再認識させられた。『Shall weダンス?』（1996/周防正行）での、会社帰りに社交ダンスという「別世界」と出会う経理課長をはじめ、役所さんが演じる人物は基本的に「根がマジメ」という点で共通していると思う。端正な風貌から、時代劇での厳格な武士役や、近年オファーが続いている山本五十六、阿南惟幾などの軍人役が様になるのは言うまでもないが、現代劇ではそのマジメさがプリズムとなって、**悲劇にも喜劇にもなる**という魅力を放っている。近い将来、平成時代の日本を象徴するマジメ人間像として、海外の日本研究家たちが注目することを密かに期待している。

さて、ここで役所さんのプロフィールを簡単にご紹介したい。1956年1月1日生まれ。つまり今年の正月に還暦を迎えた。地元・長崎の工業高校を卒業後、上京して千代田区役所の土木工事課に就職。友人に誘われて見に行った仲代達矢の舞台『どん底』に感銘を受け、22歳の時、仲代が主宰する「無名塾」に入り、俳優への道を歩み出す。「役所」という芸名が前職にちなんでいるのは有名な話だが（テレビのテロップで「役所工事」と誤記されたことも）、師の仲代氏は「役どころが広がるように」との願いも込めたといふ。1983年のNHK大河ドラマ『徳川家康』で、若き日の織田信長役に抜擢され、一躍国民的スターとなった。

「根がマジメ」という役所さんの持ち味を、現代劇に持ち込むと絶妙なおかしさを生むことを最初に発見したのは、『タンポポ』（1985）の伊丹十三監督だったと思う。役どころは、白いスーツを着こなしたマフィア風のヤクザ。しかし、見た目のワルさとは裏腹にマナーにはうるさく、食事と生き方に確固たる美学を持つ男。この作品以降、役所さんの演じるキャラクターには常にこうした「良くも悪くもマジメ」という要素が含まれるようになる。『シャブ極道』（1996/細野辰興）の破天荒なヤクザは、ある意味「悪事に熱心過ぎる男」とも言えるし、『うなぎ』（1997/今村昌平）では生真面目な性格のため妻の浮気を許せず、発作的に殺害してしまう男を的確に演じた。「ホラー」の旗手・黒沢清監督の作品（『CURE』1997ほか）では、不可解な現象に翻弄される「仕事一途の刑事」役を担い、一方で原田真人監督とは『KAMIKAZE TAXI』（1994）の日系ペルー2世の凄腕タクシー運転手、『バウンス ko GALS』（1997）の援助交際女子高生と意気投合するインテリヤクザなど、現実から一步飛躍した人物を魅力的に描き出す。3時間半の大長編『ユリイカ』（2001/青山真治）では、バスジャック事件に巻き込まれた運転手のその後の日々を、苦しみを静かに受け止めていく「名もなき人生」として見事に演じきった。

マジメ過ぎる性格が喜劇を生む役どころとしては、“原発の必要性”を真摯に受け止めて過ぎて、都心への誘致を進める都知事（『東京原発』2004/山川元）や、戦時下に不適切とされる喜劇台本の検閲・改変に取り組んだ結果、傑作誕生の手助けをしてしまう内務省の役人（『笑の大学』2004/星護）などが印象深い。林業一筋に生きてきた男が、地元によって来た映画の撮影隊に巻き込まれていく姿を描いた『キツツキと雨』（2012/沖田修一）では、変わらない日常に突然入り込んで来た映画人たちに戸惑いながらも、内心では撮影という非日常の“祭り”を楽しんでいるおじさんの「自然体の可愛らしさ」を、全身から発散させていた（これは女性ファンにはたまらないだろう……）。

こうして見てくると、彼が演じてきた様々な「マジメ人間」像は、そのまま1980年代以降の日本人社会が思い描いてきた「マジメさ」が反映されている気もする。コツコツ働いていれば報われた時代が過ぎ去ってもなお、そうせすにはいられない誠実さ。家庭と仕事を愛し、「名もなき一日」を走り続けるその姿は、たとえ戦争映画の軍人役であっても、戦後生まれの彼が演じると“わが社の危機”に立ち向かう中間管理職に見えてくるのだ。

60歳になった役所さん、今後はますます「座長」クラスのオファーが続いていくと思うが、願わくば子どもや孫の世代にあたる若い作り手とも組んで、「チャージングなおじいさん」役を開拓していただきたいと思う。三船敏郎、鶴田浩二から笠智衆まで、昭和の映画スターたちの後継者になれそうな存在は、当分の間は彼しか見当たらない気がする……。

【参考サイト】長崎バス 80周年CMギャラリー <https://www.nagasaki-bus.co.jp/recruit/businfo/lp/>



長崎バス CM (2016)



うなぎ (1997)



笑の大学 (2004)



キツツキと雨 (2012)